日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　No. 4, 39-50 (2003)

The Portrait of a Lady

－無限の苦しみから生きる喜びへの転化－

高波　優
日本大学大学院総合社会情報研究科

A Study of *The Portrait of a Lady*

－‘Conversion’ from ‘Infinite Suffering’ to ‘Joy for Living’－

TAKANAMI Masaru
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The purpose of this paper is to make clear the meaning of ‘conversion’ from ‘infinite suffering’ to ‘joy for living’. It is concluded that the meaning of ‘conversion’ from ‘infinite suffering’ to ‘joy for living’ lies in ‘wisdom’ of ‘self-destruction’ and the sense of ‘feeling’ only through ‘suffering’ and feeling ‘joy for ever’ comes from the sense of ‘feeling’ in the real world. ‘The theme of this thesis’ is largely connected with ‘our sense of value of the real world’. This ‘conversion’ from ‘infinite suffering’ to ‘joy for living’ is the truth that we keep in our mind through the time.

序論

『ある婦人の肖像』は、Henry James の初期作品の集大成ともいうべきものであるが、私は本作品の次の部分に興味を持った。

> She was a person of great good faith, and if there was a great deal of folly in her wisdom those who judge her severely may have the satisfaction of finding that, later, she became consistently wise only at the cost of an amount of folly which will constitute almost a direct appeal to charity.[1]

「一貫した賢明さを身に付ける」(‘became consistently wise’)という部分については、次の部分に注目した。

> She had not known where to turn; but she knew now. There was a very straight path.[2]

ここは、作品の最後で、イザベルがキャスパー・グッドウッドのキスから逃れ、自分の進むべき道を知った瞬間である。ここには、本作品の最大の疑問である、「何故イザベルは夫の元に戻っていったのか」という事への答えが暗示されている。この「まっすぐな道」を見つけた瞬間こそ、イザベルが「一貫した賢明さを身に付けた」瞬間であり、何の迷いもなく、夫のもとへ戻っていけたのである。そこには、結婚時の「愚かしい」イザベルではなく、「一貫した賢明さを身に付けた」イザベルがある。

では、イザベルが身につけた「一貫した賢明さ」とは何なのか。これを考える為に次の部分を取り上げた。

> And I want you to be happy – not to think of anything sad; only to feel that I’m near you and I love you. Why should there be pain? In such hours as this what have we to do with pain? That’s not the deepest thing; there’s something deeper.’ [3]

これは、ラルフの臨終の場面で、イザベルがラルフに言った言葉であるが、ここで、「苦しみより深いこと」(‘something deeper’)という言葉に着目した。なぜなら、「苦しみより深いこと」があることが分かったイザベルは、「賢明さを身に付けた」(‘became wise’)と言えるからである。本論では、これを明らかにしたが、その為にまず、イザベルの「苦悩」とは何なのかを解明した。また、本論では、「苦しみより深いこと」(‘something deeper’)を「ラルフの精神性」と結論付け、これを明らかにした。しかし、その「賢明さ」は何故「一貫した」ものなのか。これを考えるのに次の部分がヒントになる。

> Deep in her soul－deeper than any appetite for renunciation－was the sense that life would be her business for a long time to come.[4]

これは、ラルフ臨終の知らせを受けて、ローマから「ガーデンコート」へ向かうイザベルが苦悩した後で得た感覚であるが、これは「生きる」というイザベルの方向性を示唆している。そして、「苦しみより深いこと」(‘something deeper’)を知り、「賢明さを身に付けた」(‘became wise’)イザベルは、「生きる」という行為が自分のとるべき道である事を感じ取るのである。本論では、「生きること」＝「夫の元へ戻ること」の中で「賢明さ」を発揮していくことを選択したイザベルは「一貫した賢明さ」(‘consistently wise’)を身に付けたと結論づけ、本論中で、この点についても言及した。

また、冒頭で取り上げたジェイムズのコメントの中に、「～して初めて」(‘only at’)という部分があるが、ここにも注目した。「愚かしい行為」をして初めて「一貫した賢明さ」を身に付けるということは、「愚かしい行為」をしなければ、「一貫した賢明さ」を身に付けることができないということである。これは、何故なのかについても本論中で言及した。

また、先程、イザベルは、「愚かしい行為」（オズモンドとの結婚）によって「苦悩」することになったと述べた。とすると、冒頭のジェイムズのコメントは、「愚かしい行為という代価を払って、ようやく一貫した賢明さを身に付けた」だが、これは、「苦悩を通して初めて、一貫した賢明さを身に付けた」と書き換えることができる。

そして、その「一貫した賢明さ」はラルフの死を通し、「苦しみより深いこと」(‘something deeper’)＝「ラルフの精神性」を身につけるという行為を通して身に付けられる。本論では、「ラルフの精神性を身につけること」＝「喜び」という捉え方をしているが、そこにはロマン主義詩人の「想像力」と大きな関連性を見てとることができる。本論中ではこの点についても触れ、考察したが、イザベルはラルフの精神性を身に付け、「喜び」を得ることになる。そしてそれは、先述したように「生きる」という行為の中に存在する「生きる喜び」である。このように考えると、「苦悩を通して初めて、一貫した賢明さを身に付けた」は、「苦悩から生きる喜びへの転化」と書き換えることができる。そして、その「苦悩」が大変深いものであった事を考えると、「無限の苦しみから生きる喜びへの転化」という本論の題目になる。この「転化」の過程を追及していくことが本論の目的である。さらに、その追求の過程の中で、ジェイムズがイザベルを通して訴えたかったこと、さらに「本論テーマ」が「現実世界に生きる我々の価値観」とどう結びついていくのかも考察した。

第１章　無限の苦しみから生きる喜びへの転化

本章では、「無限の苦しみから生きる喜びへの転化」の本質を明らかにしたが、まず、イザベルの「苦悩」の実態について明らかにした。

１．イザベルの「苦悩」の実態

イザベルの第一点目の「苦悩」の原因は、オズモンドとの結婚生活にあると言える。この点について、次の部分に着目した。

> What he had meant had been the whole thing－her character, the way she felt, the way she judged. [5]

ここは、オズモンドが結婚後、イザベルの何が気

に入らないかについて述べている部分だが、この「彼女の性格、感じ方、判断の仕方」(‘her character, the way she felt, the way she judged’)とは何か？それは、イザベルの‘privacy’である。つまり、オズモンドはイザベルの‘privacy’を奪おうとしているのである。オズモンドには、自分で決めた生き方があり、イザベルにその生き方に合せるように望んだ結果、‘privacy’を奪う結果になったということになる。また、オズモンドは「体裁」、もっとひらたく言えば、「外見」とか「見た目」というものを重視している。これに対してイザベルは、イザベルは「見た目」ではなく、「内面」を重視したいと言っている。ここに、「見た目」重視のオズモンドと、「内面」重視のイザベルの価値観の対立の構図が見える。

オズモンドのイザベルに対する態度による「苦悩」の本質は、オズモンドが自分の人生観を貫く為に、イザベルの‘privacy’を奪おうとすること、及び、どうして夫の本性を見抜けなかったのかを考えるイザベルの思考過程にあったのである。

また、マダム・マールはイザベルの財産を利用しようとする悪の心はあったにせよ、それは自分の為ではなく、他人（オズモンドとパンジー）の為だった。そこには、自己中心的要素は無い。この「他人を思うがゆえに心に生じた悪」がマダム・マールの「悪」である。しかし、他人の為に尽くす人間が本当の「悪」と言えるのか。むしろ、オズモンドという「真の悪」によって産み出された「犠牲者」と考える方が正しい。「悪」に抵抗できず、「悪」に染まってしまう人間の弱さ、それがマダム・マールの「悪」の本質である。

また、イザベルはガーデンコートに行く旅の間に「苦悩」するが、それは、イザベルは、さまざまな「苦悩」を経て、「ガーデンコート」に行くことが、「解決」の糸口になると本能的に感じたこと、「逃げることなく生きること」が彼女の仕事だということ、自分の「苦悩」が意味を持ち、むしろ必要なことだったのではないかという事である。

２．イザベルの「苦悩」の解決

第 54 章で、「ガーデンコート」に到着したイザベルは、今まで「苦悩」してきたこと、疑問に思ってきたことへの答えを見出したのだが、ここでは、その過程を考察した。

(1)「ガーデンコート」が象徴するもの

イザベルは「ガーデンコート」とは何か、何を象徴するのか知ることが、イザベルが何故オズモンドとマダム・マールの悪に気付かなかった理由を知る上で重要だと感じたが、まずこれを探った。

「ガーデンコート」に到着したイザベルは「ガーデンコート」について次のような印象を持つ。

> Nothing was changed; she recognized everything she had seen years before; it might have been only yesterday she had stood there. [6]

これは、「ガーデンコート」の「不変性」を詠っているが、「少しも変わらず、ただ価値を高めていくもの」（行方昭夫）とは何なのかを考えるため第１章の次の部分に着目した。

> Privacy here reigned supreme, and the wide carpet of turf that covered the level hill-top seemed but the extension of a luxurious interior.[7]

> 芝生の広がっている所は完全に外部から遮断されていて、平坦な丘の頂上を覆っている芝生の広い絨毯は豪華な室内の延長に過ぎぬように思われた。（行方昭夫）

訳文では、「遮断されている」という表現が使われているが、英文には‘Privacy’という言葉が出ている。直訳すると、‘Privacy here reigned supreme’は「ここでのプライバシーは完全に守られている」となる。つまり、「ガーデンコート」はプライバシーの象徴だという意味でもある。とすれば、「ガーデンコート」の少しも変わらず価値を高めていくものとは、‘privacy’である。つまり、「ガーデンコート」が象徴するものとは、‘privacy’と言える。また、これこそ

が、イザベルがオズモンドに奪われたものであり、「苦悩」の原点にあるものである。その‘privacy’を失うことなく保ち続けているのが「ガーデンコート」である。

では、どうして「ガーデンコート」は‘privacy’を保ち続けていられるのか。その理由こそが、イザベルが求めている、何故オズモンドの悪に気付かなかったのかという疑問の答えである。やはり、「ガーデンコート」の‘privacy’を守っていたのは、主人であるラルフであるとするのが妥当である。では、ラルフはどのようにして、「ガーデンコート」の‘privacy’を守ったのか。ラルフの本質とは何なのか。さらにイザベルの本質とは何か。このあたりを解明することが、‘privacy’を守れた理由、さらにイザベルがオズモンドとマダム・マールの悪を見抜けなかった理由を明らかにすることになるので、次にこれについて考えた。

(2) ラルフの本質

ラルフはオズモンドが「悪人」(‘villain’)であると証明する証拠がないのに、彼の行動、性格などから、彼がイザベルに及ぼす悪を「予想」している。つまり、ラルフは具体的証拠があるわけではないが、物事を「予想」する能力がある。これが、

> But all the same I can’t help feeling that you’re running a grave risk. [8]

という言葉につながった。このラルフの物事を「予想」する能力とは何か。それは、「‘feel’する能力」である。つまり、「物事の本質を見抜く力」である。オズモンドの、うわべではない根底にあるものを見抜いたからこそ、このように感じたのである。そして、この「‘feel’する能力」こそが、ラルフの本質である。イザベルは‘feel’できなかったから、オズモンドの本質を見抜くことができなかったのである。そして結果としてオズモンドに‘privacy’を奪われる事になる。このように考えると、「ガーデンコート」の‘privacy’を守ってきたのはラルフであり、ラルフの「‘feel’する心」だったのである。

では、イザベルはどうして‘feel’することができなかったのか。これは、同時にどうしてオズモンドの「悪」を見抜けなかったのかという、イザベルの「苦悩」の答えにもなる。そのことを考える為には、イザベルの本質とは何かがわからなくてはならないので、次にそれを考察した。

(3) イザベルの本質

イザベルの本質について語り手の次の記述に注目した。

> It was almost as unnecessary to cultivate doubt of one’s self as to cultivate doubt of one’s best friend:[9]

この「自己懐疑」(‘doubt of one’s self’)をしないこと、他人の意見に耳を貸さないこととは、つまり、強い「自我」があるということである。このイザベルの強い「自我意識」こそが、オズモンドを選ぶことが、‘privacy’を保つことになるという誤った意識を、頑丈にガードしてしまったのである。そしてこの「自我意識」こそが、ラルフが持つ‘feel’する感覚を、イザベルに持たせまいとした元凶である。

このように考えると、イザベルの精神的な本質とは、「強い自我意識」である。そして、この「強い自我意識」を持っていることが、イザベルがオズモンドの悪を‘feel’できなかった原因であり、どうしてオズモンドの悪を見抜けなかったのかというイザベルの「苦悩」の答えでもある。では、この「強い自我意識」が、イザベルのガーデンコート到着後、ラルフに会うことによってどうなるのか。それを次に考察した。

(4) イザベルの「苦悩」の解決

「ガーデンコート」に到着し、「ガーデンコート」の‘privacy’が守られているのを感じたイザベルは、ラルフに会い、接し、彼を感じることによって、何か確信を得る。

> . . . only to feel that I’m near you and I love you. Why should there be pain? In such hours as this

what have we to do with pain?　That's not the deepest thing; there's something deeper.[10]

この「もっと深いこと」('something deeper')こそが、ラルフが持ち、イザベルが持っていなかったものであり、ラルフに、オズモンドやマダム・マールの悪を見抜かせたものである。「苦悩」することより、深いことというのは、「苦悩」を見抜くことに他ならないからである。では、この'something deeper'とは何か。

I always tried to keep you from understanding; but that's all over.[11]

イザベルの「自我意識」が、この言葉を発した時、解体されたのである。ラルフに接し、彼の愛を感じ、彼の本質、つまり'feel'する感覚に触れた時、イザベルの自我は解体されたのである。

このように考えると、'something deeper'とは、自己解体し、'feel'する感覚を身に付けることである。そして、これこそが、ラルフが持ち、イザベルが持っていなかった、オズモンドとマダムマールの悪を見抜かせるものである。この「自己解体」についてキーツは『エンディミオン』の中で、次のように述べている。

More self-destroying,. . .　[12]

Melting into its radiance, we blend,
Mingle, and so become a part of it—[13]

これは、詩人は「自己」を「解体」('self-destroying') して、対象に同化するにつれて、対象はより鮮明により豊かとなり、より活気をおび、ついには詩人は溶けて対象の輝きの一部になってしまうということを言っている。つまり、『エンディミオン』の「快楽温度計」' Pleasure Thermometer 'は「自己」を「解体」して対象に一体化することが、「想像力」の本質であることを説いたものである。ということは、「キーツの想像力」の本質は「自己解体」し対象と一体化することという事になる。キーツは「自己」を「解体」し、他と融合することにより、他の本質を見抜こうとした。自分を「無」において、「感性の真の声」('The True Voice of feeling') がひびくのを待つ態度である。[14]この態度こそ、ラルフが持ち、イザベルが苦悩の後に得た、「自己解体」による'feel'する感覚である。ワーズワスも対象と一体となるが、これは彼が「見る所のもの」を溶解して、「自分の内部にあるもの」、「心の中の風景」と化している。つまり、彼は自分を解体するのではなく、「対象を解体」したのである。このように考えると、キーツが「自己解体」の詩人であったのに対して、ワーズワスは「他者を解体」し、自己に取り込んでいった。このワーズワスの想像力は、イザベルの'privacy'を奪うオズモンドが持っていたものである。

3．無限の苦しみから生きる喜びへの転化

(1) 「生きる喜び」について

ラルフの葬式に立ち会ったイザベルは、自分が今後どうすべきか悩むことになる。このイザベルの定まらない気持ちに、方向性を与えたのが、キャスパーグッドウッドとのやりとりである。彼は第 55 章で、イザベルにキスをするが、イザベルはこの行為から逃れるように家に走り、次の確信を得る。

She had not known where to turn; but she knew now. There was a very straight path.[15]

この後、イザベルは夫の元に戻っていったのであるから、彼女は、確信を持って自分の方向性を選択したことになる。では、何故、イザベルは夫の元へ戻ることを選択したのか、次にそれを考えた。

このグッドウッドのキスの前に、イザベルは次のように感じている。

. . . but she believed just then that to let him take her in his arms would be the next thing to her dying.[16]

イザベルは、「苦悩」など無い素晴らしい世界に引き込まれそうになる。しかし、それに「抵抗する力」

が働く。

> In the movement she seemed to beat with her feet, in order to catch herself, to feel something to rest on.[17]

この「抵抗する力」は何なのか。それは、イザベルに現実を見つめさせようとする力である。「苦悩」の無い、グッドウッドの世界に飛び込むことは、ある意味で、現実逃避である。「苦悩」から逃れ、「苦悩」の無い世界に行けば、確かに苦しまなくてすむ。しかし、現実には、「苦悩」の無い世界など存在しない。それをイザベルにわからせようとする力が働いたのである。

現実の世界に「苦悩」の無い世界はないということを裏付けることがある。それは、ラルフの死後、‘privacy’の象徴である、「ガーデンコート」が売却されたことである。これは、現実の世界から‘privacy’が消滅したことを意味している。しかも、これは、第３者の力が働いたのではなく、ラルフの遺言の中にあることである。それは、ラルフが、イザベルに‘privacy’の無い現実の中で生きていくことを示唆していると言える。

しかし、‘privacy’は消滅したが、「ラルフの精神性」、つまり、「自己解体することによる‘feel’する感覚」が消滅したわけではない。それは、イザベルの心の中に再生したのである。それは、第 55 章で、ラルフの「幽霊」を見るという形で表れる。「苦悩」を経験したあとに見る「幽霊」(‘the ghost’)、これこそが、「ラルフの精神性」である。結果的に、イザベルは‘privacy’の無いオズモンドとの生活という現実を受け入れ、その中で、ラルフ的な精神性、つまり、「自己解体し、‘feel’する感覚」を持って生きていく道を選んだ。これこそが、イザベルが‘consistently wise’になった瞬間である。一時的に「苦悩」から逃避するのでなく、現実の「苦悩」を受け入れ、その中で生きていくことこそ、「一貫した賢明さ」を身に付けることだからである。

また、「一貫した賢明さ」を身に付けたイザベルは、「生きる喜び」を味わったと言える。何故なら、「喜び」とは「心が満ちた状態」であるが、「ラルフの精神性」を心に持ち、「一貫した賢明さ」を身に付けたイザベルは「心が満ちた状態」になっており、「喜び」を味わっていると言えるからである。そしてその「喜び」は、現実の「苦悩」の中で生きる「喜び」、つまり「生きる喜び」である。イザベルは現実の「苦悩」を受け入れ、その中で生きていくことに「生きる喜び」を見出したのである。

さらに言うと、「ラルフの精神性」は、「ラルフの幽霊」という形をとって、イザベルの心に再生されたことになるが、「幽霊」というのは、肉体と違って滅びることはない。つまり、永遠のものなのである。とすると、「ラルフの精神性」は「永遠のもの」となり、イザベルの心に再生されたのである。ここには、イザベルの「想像力」が働いている。このように考えると、「生きる喜び」はイザベルの「想像力」によって「永遠の喜び」になる。それは‘pleasure’ではない。「もっと大きな深い喜び」(‘joy’) である。それは「歓喜」である。

この発想には、「ロマン派の想像力」と大きな共通性が感じられるので、それについて少し触れた。まず、「ロマン派の想像力」に関する「想像力の型」である。スティリンガー[18]は「ロマン派の想像力」が‘naturalized imagination’と‘visionary imagination’に分類されるとしている。‘naturalized imagination’は「想像力」があくまで「日常体験の世界」を離れず、「見えるがままに」見ることによってそれを別なものに変形する。ワーズワスの想像力の本質は、「見えない」ものを補い膨らませていくものではなく、あくまで「見える」ものを膨らませていくものだった。

それに対して、‘visionary imagination’は日常体験の世界とは違った、この世を超えたより高い領域、「目に見えない世界」を洞察した。[19]キーツの詩は、まさにこの「見えない世界」を描いていた。

> Heard melodies are sweet, but those unheard
> Are sweeter;

この部分を理解するのに、『キーツ　光の旅－詩神に捧げられた魂』[20]で、安藤幸江は、キーツの次の手紙が役立つだろう[21]と言っている。それは、1818 年 12 月 31 日、キーツが弟のジョージ夫妻に宛てた

ジャーナル・レターである。そこで、キーツは、ピサのキャンポ･サントのフレスコ画について述べた。

> . . .　even finer to me than more
> accomplish'd works－as there was left
> so much room for Imagination[22]

つまり、「未完成」の作品の方が、「想像力」によって、素晴らしいものになるし、音楽も一緒で、耳に聞こえない音楽の方が「想像力」によって自分なりにいくらでも美しくすることができるということである。ここには、足りないものを「想像力」で補い、より素晴らしいものにするという発想がある。

また、さきほど引用した最後の部分、「若者が接吻しようとしてもできない、でも彼女は永遠に美しい」というところも、「届きそうで届かない愛」、届かないからこそ、より彼女が美しく感じられるという逆転の発想がある。つまり、「届かない愛」だからこそ、「想像力」によって彼女の美しさがより引き立つ。それは、「徹底的な否定の中に探り当てられた肯定」という発想であり、「キーツの想像力」の根底をなすものである。'Heard Melodies. . . ' の、沈黙によってこそ心にひびく真の調べを奏するというのも、やはりこの「徹底的な否定の中に探り当てられた肯定」という発想に支えられている。「否定」の中にこそ、「想像力」が働く余地が残されている。その「想像力」によって、「聞こえない音」は美しさを増し、「永遠の美」を作り出す。

「ラルフの精神性」が「亡霊」となってイザベルの心に「転化」されていく様は、まさにこの「徹底的な否定の中の肯定」である。イザベルの「想像力」によって、「ラルフの精神性」は、輝きを増し、「永遠の喜び」となって、イザベルの心に定着する。ラルフは死んでしまったのだから、もうその肉声を聞くことはできない。ラルフが生前に残してくれた言葉は、イザベルの心に響いているが、死後の言葉は、さらに美しく響いているのではないか。それは、イザベルの心に宿った「永遠の響き」である。そして、これは、「キーツ的な想像力」に他ならない。つまり、ラルフの精神性を身につける方法は、「ロマンティシズム」そのものである。

しかし、ここで注意したいのは、イザベルはラルフの精神性を持ち、「苦悩」の現実の中で生きていくことを決意したが、だからと言って、オズモンドの悪に対決しようとか、オズモンドを更正させようとか、パンジーを救おうとか、そのような決意をしたわけでは無いということである。あくまで、現実の「苦悩」の中で「賢明さ」をもって生きていくだけである。物語は、イザベルがオズモンドの所へ戻っていくところで終わっており、その後どうなったかには触れていないが、これはそのことを示している。オズモンドを更正させようとか、パンジーを救おうということがあるのであれば、そこまで書いているはずである。これを書かないのは、あくまで、現実の「苦悩」の中で生きていくイザベルの「精神性」を書いているだけであることを示している。また、イザベルが心に持った、「ラルフの精神性」とは、あくまで、'feel'するだけのものであり、'action'を起こすものではない。この「傍観者」という立場を取ることは、ジェイムズ文学の特徴でもあるのだが、読む人の中には、何故、悪を退治しないのかとフラストレーションを覚える人もいる。しかし、この作品で強調したいのは、そのようなヒロイックなイザベルではなく、あくまで、イザベルの「精神性」であるということである。ここに心理的リアリズム[23]を主張したジェイムズ文学の特徴がある。

(2)「苦悩」から得た「生きる喜び」

第５章で、ラルフはイザベルに「苦悩」を味わい、「悲惨な知識」('some miserable knowledge')を身に付けてからでないと、「幽霊」は見えないといっているが何故なのか。先述した通り、「幽霊」は「ラルフ的な精神性」であり、これを心に持ち、「苦悩」の現実の中で生きていくことが「生きる喜び」であるから、ラルフのこの言葉は、「苦悩」を通してのみ「生きる喜び」が得られると言っているのと同じである。従って、このラルフの言葉について考えた。

このラルフの言葉は、「苦悩」を通してのみ、「ラルフ的な精神性」、つまり、「自己解体」し、'feel'する感覚を身に付けられるということだが、これは、もう少し、詳しく言うと、'privacy'を奪われるという

「苦悩」を通してのみ、「自己」を「解体する」必要性を感じ、‘feel’する感覚を身に付けることができる、と言い換えられる。結果として、イザベルは、オズモンドとの結婚生活という苦悩を通して、この‘feel’する感覚を身に付けることができたのだが、では、もし、イザベルがオズモンドと結婚せず、苦悩を経験しなかったとしたら、この‘feel’する感覚を身に付けることができたのか。この点について考えた。

イザベルは結婚前は、ウオーバトン卿やキャスパーグッドウッドの結婚を退けていた。これは、彼らがイザベルの‘privacy’を奪うのではないかと本能的に感じたからである。彼らに共通しているのは、イザベルが「脅威」に感じるほど、彼女に迫ってくることであり、この「脅威」から逃れようとする本能が働いたのである。しかし、ここで注意したいのは、ウオーバトン卿やキャスパーグッドウッドの脅威が目に見えて、分かりやすかったことである。キャスパーグッドウッドは、わざわざアメリカから渡ってきて女を追いまわすという、ストーカーさながらのことをしているし、ウオーバトン卿はイザベルに会って日が浅いのにイザベルに愛の告白をしている。

このような、分かりやすい「脅威」に対しては、イザベルは反応することができる。しかし、オズモンドには、このような「脅威」は無かったのであり、イザベルはその隠された「脅威」を見ぬけなかった。そこで、ラルフの次の言葉について考えた。

> ‘You want to see, but not to feel,’ Ralph remarked.[24]

つまり、イザベルは結婚前、ウオーバトン卿やキャスパーグッドウッドの「脅威」を「見る」(‘see’)することはできたが、オズモンドの隠された「脅威」を「感じる」(‘feel’)ことはできなかった。目に見えるものは分かるけど、目に見えないものは分からない。これが、結婚前のイザベルである。では、どうして目に見えないものが分からなかったのか。それは、目に見える「脅威」から身を守り、‘privacy’が奪われることを未然に防いでいたので、苦悩することがなく、「自己を解体する必要性」を感じなかったのであり、そのために、‘feel’する感覚を身に付けることができなかったのである。つまり、‘privacy’を奪われるという「苦悩」があって初めて、「自己」を「解体」し、‘feel’する必要性が出てくる。ところが、イザベルは、そのような「隠された真の悪」というものに出会ったことがなかった。それは、次の部分に記述されている。

> She knew the idea only by the Bible and other literary works; to the best of her belief she had no personal acquaintance with wickedness.[25]

このように考えるとイザベルがもし仮に結婚せず、「苦悩」を経験しなかったとしたら、‘feel’する感覚を身に付けられなかったと予想される。「苦悩」が無ければ、‘privacy’が奪われることはなく、「自己」を「解体」し、‘feel’する必要性がなくなるからである。つまり、この‘feel’する必要性に「気付いていく」ことが重要なのである。そして、その「気付き」こそが‘consistently wise’（「一貫した賢明さ」）を身につけることであり、「生きる喜び」を味わうことである。これが、「苦悩」を通してのみ、「生きる喜び」が得られる理由である。また、ラルフが、「苦悩」を味わい、悲惨な知識を身につけてからでないと、「幽霊」が見えないと言った理由である。このことは、キーツの想像力と大きな類似性がある。それは、キーツの想像力がヤーヌス（双面神）的である[26]ということである。正反対の二つの顔を持つということ。「歓喜に向かう顔」と「苦悩に向かう顔」の二つを持った。

> 夢の美しさは現実の苛酷を見つめることによって、憂鬱の真髄は歓喜の核心をかみしめることによって、変化の哀しさは永遠を憧憬することによって、初めてその全貌が明らかにされる。それは想像力が真実に到達するための欠くべからざる道程であった。[27]

これは、まさに「苦悩」を通してのみ、「生きる喜び」が得られるという本論テーマそのものである。さらにキーツは現実の「苦悩」から逃避することなく、受け入れることによって「永遠の喜び」を大きくしたのであり、それは、現実の「苦悩」を受け入れ、オズ

モンドのところへ戻っていくイザベルと共通するものがある。これに対して、ワーズワスにはこのような「苦悩」を受け入れる余地はない。「苦悩」は「不安定」なものであり、彼は「安定性」を望む詩人だったからである。この意味でも、ジェイムズは、極めて「キーツ的」であった。

しかし、ここで注意しなければならないのは、ここで、「苦悩」の必要性を説いているわけではないという事である。本論の第２章３（１）で説明したように、「苦悩」があるのが「現実」であり、それは「必要」か「不必要か」という事に関わらない「現実」である。その中で生き抜いていく為に「気付く」ことが必要であると説いているのである。

(3) 無限の苦しみから生きる喜びへの転化

以上見てきたことから、本論文のテーマである、「無限の苦しみから生きる喜びへの転化」について考えた。

序論で述べたように、イザベルの苦悩は大変深いものであったので、それは、「無限の苦しみ」と表現することができる。そしてその「無限の苦しみ」は、オズモンドに‘privacy’を奪われるというものであり、その苦しみの解決のため、「自己」を「解体する」必要性を感じ、「ラルフ的な精神性」である‘feel’する感覚を心に再生させた。そしてそれは、ラルフの「幽霊」を見るという形をとった。また、その「ラルフ的な精神性」を持って、現実の苦しみの世界で生きていくことに、「生きる喜び」を感じた。そしてその喜びはイザベルの「想像力」によって「永遠の喜び」になった。また、その「生きる喜び」は「苦悩」を通してのみ、得られるものであり、それは、「苦悩」を通してのみ、‘feel’する必要性に気付いていくからである。

また、「苦悩」の存在は、好む好まざるに関わらない「現実」であった。しかし、「苦悩」は「苦悩」としてあるのではなく、「苦悩」をとことん追及していくと「喜び」と境界を無くしていった。つまり、「無限の苦しみ」は「生きる喜び」に転化されたのである。

以上が、「無限の苦しみから生きる喜びへの転化」の本質である。

第２章　ジェイムズの主張と我々の価値観

本章では、ジェイムズがイザベルの行為を通して表現したかったことの意味と、「本論テーマ」が「現実世界に生きる我々の価値観」とどう関わってくるのかを考察した。

１．「気付き」について

「苦悩」から「喜び」への「転化」は、イザベルが「苦悩」を通して‘feel’する感覚に「気付いて」いくことにより成し遂げられるが、これは「苦悩」しなければ「気付かない」ということである。我々も失敗して初めて「気付く」ということがあるが、この「気づき」こそが重要である。

２．「現実の享受」

イザベルはオズモンドに‘privacy’を奪われていくのだが、この‘privacy’の問題は現実の世界に生きる者にとっても、深刻な問題である。特に現代は情報化社会と言われるが、個人情報が流出し、自分のことが、全く知らない第３者に分かってしまう。このような状況下では、‘privacy’など存在しない。どんなに、‘privacy’を守ろうと頑張っても、それは不可能である。それが「現実」である。また、「苦悩」についても然りである。好むと好まざるとに関わらず「苦悩」が存在するのが「現実」である。そこで大事なのは、その「現実」から逃げようとするのではなく、その「現実」の中でいかに生きていくかである。イザベルは、最後、オズモンドの所へ戻っていくが、この行為によってイザベルは、‘privacy’が存在しないという「現実」を受け入れることになる。しかし、イザベル自身、以前のイザベルとは違う。「苦悩」を知り、「自己を解体」し、‘feel’することができるイザベルである。この変身したイザベルは、「現実」の「苦悩」の中で生きていく力を持っている。

このように考えると、ジェイムズはイザベルを通して、「現実」から逃れるのではなく、その「現実」と

向き合い、その中でいかにいきていくか、その「精神性」を持つことが大事である、ということを訴えかけている。そしてその「精神性」とは、‘feel’する力である。これは、先述した通り、「物事の本質を見抜く力」である。この力があれば、どんなに困難な状況に置かれても、生きていける。それは、まさに‘consistently wise’なのである。一時的なものではなく、「継続的な賢明さ」という意味がそこにはある。

３．「ガーデンコート」が意味するもの

イザベルはラルフの「幽霊」を見るという形で、「ラルフ的な精神性」を身につけるが、このような、「失って初めて気付く愛」というのは、*Daisy Miller*[28]等、ジェイムズの他の作品にも見られるテーマであるが、本作品の特徴は、失うのが、ラルフという「人間」と「ガーデンコート」という「建物」であり、「場所」でもあるものということである。そういう意味で、本作品における「ガーデンコート」は、大きな比重を占めている。先述したように、「ガーデンコート」は‘privacy’の象徴であるが、同時にラルフの象徴でもある。ラルフが幽霊となった時、「ラルフの精神性」は永遠のものとなり、「ラルフ的な精神性」を心に持つことは、「永遠の喜び」であるということは、先述した通りである。このように考えると「ガーデンコート」は「永遠の喜び」の象徴となる。「ガーデンコート」のこのような「永遠性」は、第１章の記述の中にふんだんに記述されている。例えば、作品冒頭にある「ガーデンコート」の午後のお茶の時間の説明は、まるで、「時間が止まってしまった」印象を与える。この「時間が一点で凍結した印象」を与えるのは、「ガーデンコート」の「永遠性」がゆえである。ジェイムズは、このようなイギリスの風景の中にある「崇高さ」や「永遠性」を「精神性」とからめて表現しているが、この「時間が一点で凍結した印象」には先述した、「キーツの想像力」と共通のものがある。キーツは束の間のあらわれに深く心を向け、その束の間の美に永遠の喜びを見出した。キーツは、

> ‘A thing of beauty is a joy for ever’[29]

を信念としたが、キーツにとって、‘A thing of beauty’とは、「束の間の瞬間の美」であり、それが永遠の喜びとなった。先述した「ガーデンコートの１点で凍結した」ような印象、「ガーデンコート」が売却され、消滅していく、その「束の間の美」にジェームズは「永遠の喜び」を見出したのである。また、ラルフのはかない一生についてもそうである。それは、まさにキーツの考えそのものである。それに対して、ワーズワスは「不変的」なものを愛したので、ジェイムズの立場とは異なる。

４．「キーツの想像力」と「本論テーマ」の関連性

本論中で何回か触れたように、「キーツの想像力」と「本論テーマ」は大きな類似性がある。本論中で、ジェイムズはイザベルを通して、「現実」から逃れるのではなく、その「現実」と向き合い、その中でいかにいきていくか、その「精神性」を持つことが大事である、ということを訴えかけており、そしてその「精神性」とは、‘feel’する力、つまり「物事の本質を見抜く力」で、この力があれば、どんなに困難な状況に置かれても、生きていける、それは、まさに‘consistently wise’なのであり、一時的なものではなく、「継続的な賢明さ」という意味がそこにはある、と延べた。この‘consistently wise’の証明の傍証として、キーツの‘negative capability’の精神性を挙げた。キーツは‘negative capability’について、手紙の中で次のように述べている。

> Negative Capability, that is when man is capable of being in uncertainties, mysteries, doubts, without any reaching after fact and reason.[30]

この‘negative capability’について、阪田勝三著の『ジョン・キーツ論考　自己解体としての想像力』[31]では、キーツとワーズワスの「想像力」を比較しながら、説明しているが、本論で何回か触れたキーツの「想像力」はこの‘negative capability’に根付くものである。キーツのこの精神性と、ジェイムズの‘consistently wise’は驚くほどにその共通性は高い。従って、「キーツの想像力」と「本論テーマ」の関連性

は高いのである。しかし、現段階では、ジェイムズがキーツについて言及したかどうかについては実証できてない。また、ジェイムズは同時に「ワーズワス的な想像力」を否定しているようにも見えるが、それも実証できていない。これらについては、今後の研究に委ねたい。

以上、「キーツの想像力」と「本論テーマ」との関連性を述べたが、ここで、気付くことが一つある。それは、1作品の中に「心理的リアリズム」と「ロマンティシズム」が同居しているということである。リチャードチェース[32]もジェイムズ文学を次のように述べている。

> . . . James's novel is akin to romance. . . [33]

この2つの主義の同居は、ジェイムズが、「心理的リアリズム」と「ロマンティシズム」が同居するところに、「文学の本質」があると考えたからである。

5.「心」と「物、知性」の問題

本作品では、オズモンドが象徴する「物」とイザベルが象徴する「心」の対比構図がある。また、「物」を支配するのは、人間の「知性」であるから、「知性」と「心」の対比とも言い換えられる。イザベルが、オズモンドのところへ戻っていくということは、このような「物、知性」中心の世界をも受け入れるということである。しかし、'feel'する感覚を身につけたイザベルはただ、このような「物、知性」に流されるのではなく、そのあふれ返った「物、知性」の中で、本物を嗅ぎ分ける力を持っている。つまり、「物、知性」中心の世界を拒絶するのではなく、「物、知性」に惑わされず、生きていく感覚を身につけているのである。

こういう事は、現実の社会でも起こっていることである。我々が住む社会は「物」が溢れ返っており、その各人が持つ「物」で人を判断することも多い。「知性」にしても然りである。発達し続ける'technology'は、我々を豊かにするが、それに振り回されて、人間としての「心」を見失いがちである。

このような風潮の中で、「物、知性」に振り回されず、物事の本質を感じて生きていく感覚を持つことが重要だとジェイムズは訴えている。しかし、ジェイムズは「物、知性」を批判しているわけではない。それは、批判の対象ではなく、受け入れざるを得ない現実なのである。そして、あくまで、「物、知性」に惑わされない、'feel'し、「物、知性」の本質を見抜く感覚を持つことを主張しているだけである。

そして、これは、「キーツ的な想像力」の発想とも関連がある。何でも与えられる世の中では、それに甘んじて自分で考えることをしなくなる。つまり、「想像」しなくなるのである。そこには、「真の喜び」は存在しない。ジェイムズは、「想像力の欠如」を警鐘している。我々は、常に物事の「表面」を見るのではなく、「想像力」を働かせ、「本質を見抜いて生きていく」必要があるのである。

結論

本論の目的は、「無限の苦しみから生きる喜びへの転化」の本質を解明することであり、結論は、「無限の苦しみから生きる喜びへの転化」の本質が、「現実」の中に存在する「苦悩」の中からのみ、「自己解体」し、本質を見抜く「'feel'する感覚」に「気付く」ことができること、その感覚を、「想像力」によって心に体現し、現実の世界に生きる事に「永遠の喜び」を感じたことであり、また、「本論テーマ」が、「現実世界に生きる我々の価値観」にも、大きく関わりがあることである。

「無限の苦しみから生きる喜びへの転化」、これは時空を越えて、我々読者の心にも生き続ける真実である。

註

---

[1] Henry James, *The Portrait of a Lady* (Penguin Classics, 1986)、p.157
[2] *Ibid*., p.636
[3] *Ibid*., p.622
[4] *Ibid*., p.607
[5] *Ibid*., p.478
[6] *Ibid*., p.614
[7] *Ibid*., p.60
[8] *Ibid*., p.394

[9] *Ibid*., p.104
[10] *Ibid*., p.622
[11] *Ibid*., p.622
[12] *John Keats Selected Poems*, p.49
[13] *John Keats Selected Poems*, p.50
[14]『ジョン・キーツ論考　自己解体としての想像力』p.25
[15] *Ibid*., p.636
[16] *Ibid*., p.635
[17] *Ibid*., p.635
[18] Jack Stillinger; *The Hoodwinking of Madeline and Other Essays on Keats's Poems* pp.124-5
[19]『ジョン・キーツ論考　自己解体としての想像力』p.57
[20] 安藤幸江著『キーツ　光の旅－詩神に捧げられた魂』北星堂書店 1999.7 第 2 刷
[21] 安藤幸江著『キーツ　光の旅－詩神に捧げられた魂』p.60
[22] 安藤幸江著『キーツ　光の旅－詩神に捧げられた魂』p.60
[23] リアリティは観察者の目にうつるインプレッションの中にあるというジェイムズの主張（亀井俊介『アメリカ文学史講義②』南雲堂、1998.10 第 1 刷 p.138）
[24] *Ibid*., p.203
[25] *Ibid*., p.565
[26] 同上書 p.37
[27] 同上書 p.39
[28] Henry James, *Daisy Miller* (Penguin Classics, 1878)
[29]『ジョン・キーツ論考　自己解体としての想像力』p.39
[30] H.E.Rollins,ed.;*The Letters of John Keats* (Harvard U.P.,1959) Ⅰ,193.
[31] 阪田勝三著『ジョン・キーツ論考　自己解体としての想像力』南雲堂、1982.3 第 2 刷
[32] Chase, Richard Volney, 1914－1962
[33] Richard Chase, *The American Novel and its Tradition* (The Johns Hopkins University Press, 1957), p.118

参考文献

Ａ 使用テキスト

Henry James, *The Portrait of a Lady*　(Penguin Classics, 1986)

Ｂ 引用文献

John Keats, *John Keats Selected Poems* (Penguin Classics, 1999)

William Wordsworth, *William Wordsworth Selected Poems*　(Penguin Classics, 1994)

Jack Stillinger; *The Hoodwinking of Madeline and Other Essays on Keats's Poems*(Illinois U.P.,1971)

Richard Chase, *The American Novel and its Tradition*(The Johns Hopkins University Press, 1957)

Henry James, *Daisy Miller* (Penguin Classics, 1878)

亀井俊介『アメリカ文学史②』南雲堂 1998.10 第１刷

阪田勝三著『ジョン・キーツ論考　自己解体としての想像力』南雲堂、1982.3 第 2 刷

出口保夫訳『キーツ詩集』白皇社、1996.9 第 8 刷

安藤幸江著『キーツ　光の旅－詩神に捧げられた魂』北星堂書店 1999.7 第 2 刷

Ｃ 第 2 次資料

Perspectives on James's *The Portrait of a Lady* (New York University Press, 1959)

Anderson, Quentin, *The American Henry James* (New Brunswick:Rutgers University Press, 1957)

富田　仁編　寺崎隆行他著『欧米文学を読む』花林書房 1986.7 発行

秋山正幸著『ヘンリー・ジェイムズ作品研究』南雲堂 1986.12 第 2 刷

芦原和子著『ヘンリー・ジェイムズ素描』北星堂書店 1995.3 初版

(Received:May 29,2003)

(Issued in internet Edition:July 07,2003)